天保年間の花笠文京—補正

木越俊介
Shunsuke KIGOSHI

江戸時代後期の戯作者・花笠文京について、本誌前号（十号、二〇〇四）において天保三年までの年譜を掲載した。それに続く天保四年以降の活動の一部については、かつて『近世文藝』69号（一九九九・一）掲載の拙稿「〝代作屋大作〟花笠文京の執筆活動について」（以下、「前稿」）で述べたのだが、その後の調査により前稿の立論の一部に対し反証材料を見出したので、天保四年以降の年譜発表に先立ってここで補正を行いたい。

問題箇所は、文京の天保年間の上方行きについてである。前稿で筆者は、文京が天保十一年（一八四〇）刊『役者金剛力』より「百文舎外笑」なる変名で役者評判記の江戸の巻を担当している事実を諸資料から実証した。さらに、弘化三年（一八四六）以降刊と見られる『役者三十六家選』という書の序（「百文舎外笑」名義）の「浪華に在ては三世八文舎自笑といひし」との記載により、天保十一年に先立つある年に文京は上方へ渡り、その地で「八文舎自笑」名義で役者評判記を執筆していたと見られることを指摘した。ここまでは何ら訂正事項はない。

ところが、前稿第三節において筆者は天保六年正月刊『役者現銀店』京の巻「開口」の内容からそれが文京の手によるものと見なし、文京が天保五年中に上方へ渡ったと結論づけてしまった（詳細な考証過程は前稿を参照されたい）。しかしながら、前稿発表後に見出したいくつかの文京の活動を踏まえると、この見解には矛盾が生じるようなのである。ここで一度前稿における筆者の見解をまとめてみる（太字は訂正の必要のない箇所）。

天保五年（一八三四）二月七日、火事罹災により蔵書等を焼失。
↓天保五年中に上方へ（①）。
↓天保六年正月刊『役者現銀店』京・大坂の巻以降、上方で役者評判記を執筆する（②）。
↓天保十年中に江戸へ帰り、「代作屋大作」と名乗り活動を始める（③）。
↓**天保十一年刊『役者金剛力』江戸の巻以降、「百文舎外笑」名義で役者評判記執筆。**

補正が必要なのは、右の①から③の時期や因果関係に関してである。以下、番号順に再検討を加えていくことにしたい。

まず①の年時推定において次のような資料の存在を見落としていた。文京が序（「好色外史」名義）を寄せる『夫は深川 是は浅草 百夜町仮宅通』[1]なる艶本があるのだが、本書の刊記について、林美一氏『国貞』[2]は、「内容が天保六年正月の火事を扱うことなどから」、天保七年正月刊は動か

せないとしている。そして本作の中之巻の会話にこの当時の文京の動向を窺わせる楽屋落ちが見られるのである。

かめ「そりやァ、ありがたう。しかし今日はね、花笠が会でございますから、宅でそれへ往なくつちやァならないはね。（略）」

文「そうか。それぢやァ、お留守がないといふわけか。その花笠とかいふのは、何処の人だへ」

かめ「それは、アノ、おまへ狂言作者で、今は芝居をば引て、こゝの一の権現に居まさァ。代作屋といつて、引札や能書の作をして居る人さ」

文「ムゝ、しれた〳〵それぢやァおらが向の薬屋の引札を書た人だ。文章といひ、趣向も甘いものだ」（傍線は引用者による）

最後の「向（島？）の薬屋の引札」云々について確認はできていないが、傍線部にある「一の権現」とは、浅草花川戸にあった顕松院境内のあかざ堂のことであり[3]、この資料からは文京が天保六年中に江戸にいた可能性が高いこと、ならびに天保七年以前から既に「代作屋」と名乗って活動していたことが判明するのである。後者については③に関連するため後述するとして、いましばらく右以外のこの時期における文京の活動の軌跡をざっと見ていくことにしよう。

まず、文京は「天保七年丙申春」の刊記を備える『四季漬物塩嘉言』（外題『漬物早指南』）なる書に序文を寄せているが、その序末には、「漬物の問丸小田原屋の茶室において筆を採。花笠文京［印（文京）］[4]」とある。この序には年誌がないが、本書の内題下に「江戸　小田原屋主人著」とあるように、「小田原屋の茶室」は江戸にあるので、ごく自然に考えるとやはり文京は天保六年の時点ではまだ江戸住であったことが窺える。また天保七年刊の大田南畝『かくれ里の記』には跋を寄せているが、この書からは文京の在住地を知る手がかりは見いだせない。

他に、この時期の文京は艶本をいくつか執筆しているようだが、現時点で内容を確認することができたのは、「好色外史」名義『花以嘉多』[5]、「曲取主人」名義『恋のやつふぢ』[6]、「好色外史」名義『枕辺深閨梅』[7]の三作である。艶本には当然のことながら刊記がないので、以下それぞれの刊年などを確認しておこう。

まず『花以嘉多』については、早川聞多氏が「序の最後に「あめ（天）やすらかにな（保）、つといふとしの花見月（七）」と款記のあることから、本書は天保七年（一八三六）三月に序文が記され、当時の出版の通例に従つて翌天保八年正月の新板として出版されたものと思はれる[8]」としている。次の『恋のやつふぢ』は、かの『八犬伝』を艶本化したものとして比較的有名であるが、その刊年について、林美一氏は前掲『国貞』で、「刊記はないが天保七年（一八三六）四月二十四日から江戸の森田座で「八犬伝」が初めて『八犬伝評判楼閣（うわさのたかどの）』と題して脚色上演され大当りをとっているから（大坂では既に天保五年に上演している）、それを当て込んで早速、翌八年正月の新板として売出したものであろう[9]」としている。両者ともに首肯すべき見解であろう。『枕辺深閨梅』は序に「于時天保九戊戌初夏／好色外史撰」とあるから、翌十年正月刊と見てよかろう。

ちなみに、これらの艶本の前二書ともに内題下署名の上に「東都」、後一書には「江戸」という記載があるが、これが文京の江戸在住を示すものなのかどうかは筆者には判断がつかない。

また、『国書総目録』によればこの時期の文京の著作として艶本『古能手佳史話』（渓斎英泉画、天保七年刊）が記載されるが、「日本艶本目録（未定稿）による」とあり、筆者は未見である。

やや煩瑣な事項を重ねたので、ここまで言及した資料を表にしてまとめておこう（表の便宜上、執筆時期ではなく刊行時期に統一した。ゴシックは掲出書名）。

年	役者評判記名	文京の動向並びに関連著作
天保五	『役者三世相』	※二月七日火事罹災。
六	**『役者現銀店』**	春刊・**『四季漬物塩嘉言』**に序を寄せる。
七	『役者手柄競』	正月刊・艶本『夫は深川 妻は浅草 **百夜町仮宅通**』に序を寄せる。 大田南畝『**かくれ里の記**』に跋す（刊記などなし、浜田義一郎氏は本年刊とする）。
八	『役者早速随』	艶本『**古能手佳史話**』刊か（未見）。 正月、艶本『**花以嘉多**』・『**恋のやつふぢ**』刊。
九	『役者ひめ飾』	正月、艶本『**枕辺深閨梅**』刊。
十	『役者外題撰』	※本年から「百文舎外笑」の変名で役者評判記の江戸評を執筆。
十一	**『役者金剛力』**	

ではそもそも、従来文京に関する伝記に記載されてきたこの時期の上方滞在そのものが訛伝だったのであろうか。

参考までに、大東急記念文庫には『（難波金城在番中）銀鶏雑記』[10]（五冊）と題される資料が蔵されており、これは表紙に「天保五年歳在甲午八月四日ヨリ乙未之八月四日迄一ヶ年」とあるように、平亭銀鶏が天保五・六年の大坂滞在時に残した書である。このうち貼込帳である第一巻の中に文京の書いた引札を見出すことができる。それは「東都産物處　大坂心斎ばし筋清水町西南角／江戸店　金屋喜五郎」という大坂の店のものだが、文句に「江戸の仕入と意を合せ。居ながらにして。東都の産物流行を即に取よせて。聊商賣始し處」とある通り江戸の物産を扱う店なので、残念ながらこの資料からは文京がこの時点で江戸、上方のどちらに在住していたかは判明しない。

さらに銀鶏がこの大坂滞在時に執筆した『街廼噂（ちまたのうわさ）』（天保六年刊）[11]は、江戸から大坂へやって来た作中人物による大坂案内記といった内容であるが、そこに「魯助さんの教へた心斎橋筋の先生へ尋ねて」などと度々文京（魯助）の名が見える。しかしここでの文京は以前の在坂経験から、専ら作中人物にとっての、大坂についての情報提供者並びに大坂人への紹介者として描かれているのである。

もう一つ参考までに、前掲『枕辺深閨梅』は大坂が舞台となっているが、かつて文政年間後半に上方に滞在したことのある文京ならば江戸にいても書くことは十分可能であったろう。

他にもこの期間に天保七年（一八三六）に江戸で刊行された『現在廣益諸家人名録』に文京の名があがるものの、該書には当時上方に滞在していたことが明らかな人物が複数掲載されているのであまり参考にならない。

右のように、この点については今のところ確たる資料を見出せていないというのが実状である。もしこの時期の上方滞在そのものが否定されるならば、文京が上方で「三世八文舎自笑」と名乗っていた時期（先の前稿見解の②の部分）は、文政八年（一八二五）から天保三年（一八三二）までの上方滞在時（本誌前号年譜参照）に遡るのではないかという可能性が浮上する。これについては何らかの資料の出現を待つこととして保留したい。

ともかく、たとえ文京がこの期間のいずれかに上方へ行っていたとしてもその年時を確定するに至る資料を見出すことはできないのだから、少なくとも天保六年刊『役者現銀店』「開口」を書いたのが文京であったとした前稿の立論は、全く根拠薄弱な先走った断定であった

と言わざるを得ず撤回したい。[12]

ただ、前稿に引用した『役者現銀店』京の巻「開口」には役者評判記の権威復権とともに役者たちへの牽制が見られ、明らかに役者評判記の立て直しの意図が感じられる。ここに文京が関与していないとしても、天保四年に文京が江戸の役者を罵倒した『役者必読妙々痴談』とほぼ時を同じくして役者評判記にも類似した言説が生み出されているわけであるから、東西の歌舞伎界周辺に役者に対する不穏な空気が漂いつつあったことを窺わせて興味深い。

それでは最後に、保留していた③の「代作屋大作」と名乗るに至る経緯について再検討を加えたい。この点に関しても年時はもちろんのこと、事象の因果関係における考え違いがあった。すなわち前稿においては、天保中期に上方へ渡った文京が「八文舎自笑」名義のいわば代作を経験したことにより、その後江戸に帰って「代作屋大作」と名乗ったと見ていた。ところが実際は、前掲艶本『百夜町仮宅通』の楽屋落ちに見られたように天保六年中に既に「代作屋」の名で活動していたことが確認できるのである（この点は平亭銀鶏『街廼噂』二編にも同様な記述を見出すことができる）[13]。また、この時点で文京が「芝居をば引」（前掲『百夜町仮宅通』）ていたというのであるから、やはり『役者必読妙々痴談』等の刊行が歌舞伎界との間に何らかのしこりを残していたのだろう。こうしたことを考え合わせると、天保五年における蔵書の焼失も含め、一連の事件がこの時期の文京の活動に制約をもたらし、「代作屋」稼業を始めさせたとするのが妥当なようである。天保五年の火事罹災が文京にとって相当な痛手であったことは前稿で紹介した『渡世肝要記』三編下巻の他に、前掲『役者金剛力』（天保十一年刊）江戸の巻「発端」にも窺える。そこで文京（「百文舎外笑」名義）は江戸を言祝ぐ中で、「只疵とするは時々火事のあるには誰も閉口。どうぞこのうへには四里四方の端からはしまで町々をみな土蔵造りにしておいたなら、夫こそ萬代不易のはんじやうといふもの」と記している。

＊　＊　＊

以上で拙稿の補正を終えるが、今回未詳の部分はさらなる調査を継続し追究したい。なお、前号年譜についての追加事項もあるが、それについては天保四年以降の年譜とともに機会を改めて記すこととしたい。

【注】

(1)女好庵主人（＝松亭金水）作、婦喜用又平（＝歌川国貞）画。原本未見。影印・翻刻が「江戸名作艶本」九（田中優子氏翻刻・解説、学習研究社、一九九六）に備わり、引用はこれによる。

(2)「江戸枕絵師集成」（河出書房新社、一九九四再版）。

(3)前稿注30において紹介した『渡世肝要記』三編下巻に記された罹災後の文京の浅草転居と一致する。ただし前稿ではこれを「仮居」と見なしていた。

(4)引用は京都大学財部文庫本による。また、本書には挿絵に「過し頃浪花にありける時茶粥にくもじといふ事を／花笠文京　にごり江のなにはなしとも朝茶かゆ／ゆがみもじにてたうべたりける」とあり、やはり執筆時点では江戸にいたことを窺わせる。

(5)外題による。内題は「玉液池話花筏」。仇埜山人（未詳）との合作、一妙開程芳（＝歌川国芳）画。原本は下巻のみ立命館大学アートリサーチセンター・林美一コレクション蔵本を閲覧。影印・翻刻が「江戸名作艶本」十（早川聞多氏翻刻・解説、学習研究社、一九九六）に備わる。

(6)不器用又平（＝歌川国貞）画。原本未見。影印・翻刻が「定本・浮世絵春画名品集成」六（林美一氏・リチャード・レイン氏共同

監修、河出書房新社、一九九六）に備わる。

(7)一妙開程芳（＝歌川国芳）画。原本は上・下巻のみ立命館大学アートリサーチセンター・林美一コレクション蔵本（中巻欠）を閲覧、引用もこれによる。

(8)注（5）前掲書・解説による。

(9)注（2）前掲書一一六頁。

(10)近年、『浪花の噂話』（中村幸彦氏・長友千代治氏編、汲古書院、二〇〇三）に影印として所収された。

(11)鶴屋喜右衛門・鉛屋安兵衛・河内屋太助刊。表紙見返しに「天保六年歳在乙未七月中幹彫刻告成」とある。引用は『浪速叢書』14・風俗（浪速叢書刊行会、一九二七）による。

(12)これにともない、拙稿「花笠文京と劇界」（『芸能史研究』146号、一九九九・七）第三節における、文京の『役者現銀店』執筆を前提として考察を行った箇所もあわせて削除したい。

(13)岩瀬文庫に自筆稿本のみが存する（注（10）前掲書に影印所収、以下の引用もこれによる）。やはり本書も初編と同じく銀鶏の大坂滞在中の見聞をもとに書かれたもので、その巻一・十二丁裏に大坂で「手紙かき所」という看板を見た作中人物（江戸人）のセリフとして「江戸ではじめると当りやすぜい。魯輔さんの代作屋も此上手を往たのでゴザリヤスから」と見える。

（日本近世文学）